

# カザフスタン・アルマトイとロシア・サンクト・ペテルブルグの本屋

## ―歴史研究のなかでの本屋の位置づけ―

長沼 秀幸

### ●はじめに

本稿では、カザフスタンとロシアの二都市、それぞれアルマトイとサンクト・ペテルブルグにある本屋について紹介したい。筆者は歴史学を専門としており、アルマトイには二〇一五年に三度、研究に必要な資料調査を行い、サンクト・ペテルブルグには同様の目的で二〇一五年一〇月から二〇一六年三月までの約半年間滞在した。現地での生活は、基本的に文書館や図書館などでの行政文書や研究文献の調査が主であり、書店巡りはその合間をぬって行うのみであった。したがって、以下に述べる情報は質・量ともに相当限定的なものであることを最初にお断りしておきたい。加えて、本特集のテーマである古本屋と本稿の内容とのかかわりについても最初に断っておかなければならない。本稿で

扱う二つの国には、たしかに少なからず古本屋は存在する。ただ、近年では古本屋の数は減少傾向にあり、加えて、そうした書店で扱う書籍の大半がソ連期の文学作品であるため筆者自身の研究とあまり深いかわりはない。そのため以下では、主に筆者の研究生活のなかで利用する一般の書店について述べることにしたい。

書店の話にうつる前に、まずは簡単に両都市について紹介しておきたい。アルマトイはカザフスタン共和国の最南東部に位置しており、キルギスや中国との国境に近い。一九九七年にアスタナへ遷都する以前は、アルマ・アタという名称でカザフスタンの首都であった。遷都後も、経済や文化の中心地であり続け、街は活気であふれている。地理的に、街は全体として傾斜しており、南へ向かうにつ

れて標高は高くなる。基本的に、都心部は南北の基盤目状に区画されており、街中をタクシー、バス、トラム、マルシュルート（定員一〇名程度の小型バス）が走っていて交通の便は悪くなく、旅行者には優しい都市といえる。カザフスタンは現在、日本を含めた二〇カ国を対象に、カザフスタンの国境通過後一五日までのビザ免除制度を実施しているが、筆者が訪れた二〇一五年の段階でもこの制度は存在していた。この制度は主にヨーロッパ諸国が対象となっており、そのためか筆者が滞在した折には相当多くのヨーロッパからの旅行者と出会った。カザフスタンではカザフ語（国家語）とロシア語が公用語として定められているが、英語や中国語への関心が高いように思われる。特に若い世代を中心に、就職のためにこれらの言

語を習得しようとする熱意がさまざまに、彼らの親の世代からは「最近の若者は昔の世代よりロシア語が下手になってきている」と小言をいわれるくらいである。こうした状況を反映してか、アルマトイでは比較的安価なホテルなどでも英語を話せるスタッフがおり、言語の面でも旅行者にやさしい都市である。なお、宇山智彦・藤本透子編『カザフスタンを知るための六〇章』（明石書店、二〇一五年）では、歴史、政治、経済、文化など幅広いジャンルにわたってカザフスタンを紹介しており、カザフスタンに興味を持った人には一読を勧めたい一冊である。

一方のサンクト・ペテルブルグも、かつてはロシアの首都であり、現在でもロシア第二の都市である。フィンランド湾に面するこの都市は、一七〇三年に時のツァーリ（帝政時代の君主の称号）ピョートル大帝が「西欧への窓」として建設した。そのため、地理的にはロシアのほぼ最西部に位置している。カザフスタン同様ロシアも旧ソ連邦の構成国のひとつであり、共通点が多い。前述の交通機関もほぼ同様の状況である。ただ、アルマトイと比較すると、地下鉄網が相

当発達しているので、サンクト・ペテルブルグの方がより旅行者には便利であろう。言語面では、アルマトイより不便である。筆者が滞在したのはサンクト・ペテルブルグ国立大学の寮であったので、英語や中国語などいろいろな言語が飛び交う空間に身を置いていたが、街なかでは基本的にロシア語しか通じない。ただ、個人的な感触として、概して親切な人が多いので（そんなことはないという人も多いが）、ロシア語を解すれば居心地の良い都市ではある。なお、こちらについても次の参考図書であげておきたい。下斗米伸夫・島田博編『現代ロシアを知るための六〇章 第二版』（明石書店、二〇一二年）。

このように、かつてはともにソ連邦の構成国であった二つの国家の主要都市であるアルマトイとサンクト・ペテルブルクであるが、以下では、主に筆者の体験に照らして両都市の書店について述べてみたい。

## ●カザフスタン共和国アルマトイの本屋

まず全体的な印象として、筆者が訪れたアルマトイには比較的

本屋が多いように思われる。アルマトイはカザフスタン最大の出版都市であり、発行部数ではカザフスタン全体の九割近くをアルマトイおよびアルマトイ州が占めている。言語別では、カザフ語とロシア語が上位の言語であり、この二つだけで全体の八割以上を占めている。カザフスタンの国立図書館の統計によれば、ウイグル語、英語、ウズベク語、ドイツ語などでも出版されているようであるが、これらはほとんどみかけないといってもいいくらい希少である。人気の分野は、教育・語学系統、および小説・エッセイなどの文学の分野である。教育に関するものは、いわゆる初等・中等教育レベルの教科書（筆者がみた限りではほぼすべてカザフ語であった）が中心であり、カザフスタンの教育水準をみるにはいい材料となる。語学については日本におけるそれと似通っており、英語やフランス語などの欧米言語および中国語学習の辞書・教材が多い。文学の分野では、英雄叙事詩など主にカザフ文学にかかわるものが多く、自身の研究とは直接関係はないが、筆者が日常的によく目にする歴史的人物に関する小説もあり、読み物として

非常に興味深いものが多い。

では、筆者にとって最大の関心ごとである歴史書についてはどうか。残念ながら、街なかにある一般書店には歴史関係の学術書はあまり多いとはいえないのが現状である。明確な理由はわからないが、前述の出版状況を反映しているのであろうか。基本的に、学術書は大型書店にて買い求めることになっている。いわゆる大型書店に分類できるのは、アタムラ（Атамұра）、エコノミクス（Экономика）、アカデム・クニガ（Академкнига）、クニージュヌイ・ゴロド（Книжный Город）などがある。このうち筆者が訪れたことがあるのは、アカデム・クニガとクニージュヌイ・ゴロドである。おむねどちらの書店も状況は同じであるので、以下では、主に筆者の体験談に基づいてアカデム・クニガについて紹介したい。

## ●アカデム・クニガ

アカデム・クニガは、フルマノフ通りを北へ進み、ゴーゴリ通りと交差する地点に存在する。朝の10時から夜の八時まで営業している。ちなみに、フルマノフ通りには同名の別の書店があり、筆

者は一度間違って入店したことがあるが、この店はあまり品揃えがよいとはいえない。配架スペースは一階の一フロアのみであり、店舗自体は比較的小規模である。入店すると所狭しといろいろな分野の本が各本棚に敷き詰められているのがわかる。店内には数人のスタッフが常時おり、彼らは基本的に本棚の整理をしているか客と話している。筆者はかつて、アジア諸国の本屋では店員（特に店主）とこまめにコミュニケーションをとり、彼らとの信頼関係を築くと、自らの研究にとってプラスに作用することがあると聞いたことがあった。本屋の店主といっても彼らの知識は並みの研究者を凌駕していることがしばしばであり、それまで知らなかった貴重な文献を紹介してくれたり、仮に探し求めている文献がその書店にない場合でも、それを取り扱っている他店に取り次いでくれたりしてくれるからだ。筆者もそのような体験を期待して、店員に話しかけ自らの研究内容を説明し、その内容にあうような本を紹介してもらおうとした。しかし、入り口から左奥にある小さなスペース（歴史学関係の学術書のスペース）に連れていか

れだけであった。同書店には滞在中に何度か足を運んだが、ついぞ期待していたような出来事は起きなかった。当店以外に筆者が訪れたクニージュヌイ・ゴロドの場合もそうであるが、このような比較的大きい書店では若い店員が多く、前述したような研究者顔負けの店主にはまずお目にかかれないといってもよいかもしれない。

さて、その歴史関連の学術書スペースについても少し述べておきたい。そこには合計で本棚が四つ程度あるのみであり、想像していたよりも小規模であった。大まかな分類としては、祖国史、つまりカザフスタン史のコーナーと外国史コーナーの二つに分かれている。言語的に、前者の本はおおむねカザフ語かロシア語であるが、印象としてはカザフ語文献の方が多かった。一方、外国史の大半は歴史的にカザフスタンとのつながりが深かったロシアの歴史が占めており（したがって、言語はほぼすべてロシア語）、近年の経済や国際政治を反映してか中国に関連するものもちらほらみられた。本の出版年についてもまちまちで、基本的には過去二〇年以内に出版されたものが大半であるが、なかには

二〇世紀前半の書籍もまじっていたりする。

つまり、一般的な書店と古本屋を融合させたような品揃えであるといえる。

われわれ研究者にとつては、祖国史コーナーにある本が最も貴重である。祖国史に関する本の多くが、科学アカデミーなどの研究機関のプロジェクトに基づいて出版されたものである。内容的には、歴史資料集の多さが目を引く。近年、歴史資料集はものすごい勢いで出版されていて、日本にいるとなかなかそれらを入手するのは難しい。加えて、これはロシアにも当てはまることだが、学術書に関しては発行部数が五〇〇部以下であることもしばしばであり（そのような本は装丁の強度で見分けられることが多い）、発行の段階ですでに貴重書である。価格は、日本に比べると非常に良心的で、どんな本でも五〇〇〇テンゲ（カザフスタンの通貨。日本円に直すと一〇〇〇〇テンゲで三〇〇〇円程度である）を出せば購入可能である。筆者がカザフスタンに調査に行く際には必ず大きなリュックとスーツケースを持っていき、現地で必要となる荷物はほぼすべてリュック

クに詰め込み、スーツケースは基本的にからの状態にする。そして、帰りにはこのスーツケースいっぱいに本を詰め込んで帰るのである。

### ●サンクト・ペテルブルグ最大の本屋ドーム・クニージ

本節では、筆者の経験に基づきサンクト・ペテルブルグの本屋について紹介したい。カザフスタンとともに旧ソ連邦の構成国のひとつであったロシアの書店をみると、かつては似たような文化圏にあった両者の、現代における類似点や相違点などが鮮明になるからである。ここでは特に、おそろく同都市においてもっとも有名なドーム・クニージという書店をみてみたい。この本屋はサンクト・ペテルブルグの中心部にあり、ネフスキー大通りとグリボエドフ運河海岸通りの交差点に位置している。近くにはロシア国民図書館（Российская национальная библиотека）があり、また筆者が当時籍を置いていたサンクト・ペテルブルグ国立大学からも徒歩一五分程度の距離にあったため、勉強の息抜きとして足しげく通っていた。営業時間は朝の九時から夜中の一二時まで、建物はゼロ階



ドーム・クニージの歴史学コーナー

（地下）、一階、二階の計三階建てである。ドーム・クニージはもちろん本屋として有名であるが、店内に入るとすぐに気がつくが、おもちゃ、文房具、おみやげなども同時に販売されており、扱う商品は幅広い。出入り口のある一階には主に新刊書やサンクト・ペテルブルグの歴史にかかわる本などが、二階には児童用書籍などが置いてあり、筆者が探し求めているような学術書は主に地下のゼロ階にある。

ゼロ階にある書籍は、大きく分けて社会科学、自然科学、古本・貴重書の三つである。歴史学に関する書籍は社会科学のコーナーの



一区画を占めている。日本の書店とよく似ており、このような大型書店では基本的に「流行」にあわせて書籍を販売している。この「流行」とは、その時々々の政治・経済情勢と関連した社会的な関心ごとであったり、歴史的に記念となる年に関連する内容のことである。筆者が滞在していた二〇一五年から二〇一六年は、現代におけるウクライナ問題、第一次世界大戦（二〇一四年が一〇〇周年）、ロシア革命（二〇一七年が一〇〇周年）が現代的・歴史的に大きな関心ごとであった。そのため、ロシア・ウクライナ関係史、クリミア史、戦争および革命を含む軍事史にかかわる書籍が歴史学コーナーのかなりの部分を占めていた。その他には、これらのテーマと深く関連しているドイツなどの外国の歴史書が目についた。

このような状況のため、外国の歴史に関する本は多くないように思われる。筆者が研究しているカザフ・ロシア関係史に関しても、過去の本の再販も含め、近年ではこのテーマにかかわる著作が少なからず出版されているのだが、ほとんど目にすることはなかった。それらの多くがカザフスタンで出版されていることを考えると、やはり海外の出版社の書籍はあまり扱わない傾向にあるのであろうか。以上が、筆者が訪れたカザフスタンとロシアの本屋に関する情報である。全体として、どちらの国の書店も、日本にある一般的な書店とほとんど変わらない。ただ、筆者の専門分野にかかわる書籍という観点から見ると、これらの国では日本と比べて外国の歴史に関する書籍は少ないといえる。あるにしても、政治的・経済的に利害関係にある国を扱ったものが主である。それ以外の国々に関して、そもそも関心が低いのか、関心は高いが研究者が少ないのか、はたまた出版の許可が下りないのか、どのような要因が作用しているのかは知り得ないが、日本で暮らす者としてはやや物足りないと感じてしまった。余談であるが、以前イギリスのロンドンやオクスフォードでも資料調査をしたことがあるが、その時も書店に関しては同様の印象を受けたので、むしろ以上のような状況が世界のスタンダードなのかもしれない。

## ●おわりに―書店の本と自身の研究―

最後に、筆者自身の研究と、ロシア、カザフスタンで出版された書籍との関わりについても簡単に触れておきたい。前述のように筆者の専攻は歴史学である。研究において必要となるのは、歴史資料と研究文献である。筆者の場合前者は主にロシア、カザフスタンそれぞれの国の文書館で入手するため、本稿の趣旨とは関係がない。関係があるのは後者の研究文献であるが、実は、研究生活全体において本屋の役割はあまり大きくない。「その書店でしか手に入らない」という書籍がほとんどないからである。理由はいくつかあるが、最も大きいのはインターネットの普及である。日本とは異なり、ロシアやカザフスタンでは著作権の概念がそれほど社会的に普及しているとは考えられず、古本であるか新刊であるかを問わず、インターネットで無料で手に入ることが多い。加えて、ロシアでは一九世紀初頭に納本制度が作られたため、かなりの古本であっても現地の図書館で閲覧が可能であり、ものによっては電子化されてウェブ上で容易にみられることもしばしばである。こうした点は、日本を含めたその他の国々と大きく異なるのではないだろうか。どちらが良いかは容易には判断がつかないが、今後、ロシアやカザフスタンでは著作権制度をより厳格に遵守しようとする方向に向かうであろうし、また一方で電子化の動きもより活発になっていくであろう。そうした流れのなかで、本屋・古本屋はどのような位置づけになっていくのであろうか。今後の展開が楽しみである。

## 《付記》

本稿の執筆にあたって、グルミラ・スルタンガリエヴァ氏（カザフ国立大学歴史学部教授）、アレクサンドル・ソコロフ氏（サンクト・ペテルブルグ国立大学歴史学部教授）、およびアセリ・ビタバロヴァ氏（北海道大学大学院文学研究科博士課程）から貴重な情報をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

（ながぬま ひでゆき／東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）